

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

## 【第1回「ピット・昇降路編」「私とエレベーターの奇妙な偶然」】

「私は何かのミッションを帯びている気がする。」偶然がそんな気持ちと呼び起こし、日本エレベーター協会さんの扉を叩いてみようと思いいちました。初めまして。今回から日本エレベーター協会さんの機関誌に投稿をさせていただくことになりました。日米の昇降機の違いや、アメリカの事情などを楽しくお伝えしようと思います。

### 1. アメリカのエレベーター安全規則

ASME A17.1がアメリカの規則です。ASMEは日本人の間では「アスメ」と呼ばれることが多く、アメリカ人には「アズミー」と呼ばれています。ローマ字読みする傾向と、「AS」と「ME」に分けて英語らしく発音するところでも日米の特徴が出ますね。昨年11月30日には2016年版が発行されました。総ページは500ページを超える長編です。

ASMEの編集委員はごく一部を除きボランティアで形成されています。大勢の人たちが手分けをして編集しているため、文章のくせが出ていて、別々の人が書いたと感ずるときがあります。長さの単位はインチとミリメートルが併記されています。国際標準に近づける意欲でしょう、表記はミリメートルが先で、インチは後でしかも括弧でくくってあります。

面白いことに同じ80インチでも2,025mmと書いてある章と、2,030mmと書いてある章があります。全体的にチェックをする人もいるはずですが、時間が足りなくてインチだけ確認したのでしょうか？皆さん「手弁当」で頑張っているの、大目にみてください…と思っていることでしょう。

数字をきっちり決めてあるものが多くあり、「なぜ？」や「へー！」と思うようなものがあります。いくつかご紹介しましょう。条文通りに直訳していませんが、解りやすさ優先のためご容赦ください。

#### 1.1 「Section 2.1.6 昇降路の壁の出っ張り」

(写真1)

昇降路の壁に100mmを超える出っ張りがあるてはならない。ある場合は、その上面に75度以上の傾斜をつけること。または金網で覆うこと。

どうしてこんな規定が必要なのか疑問に思いませんか？アメリカ人に尋ねてみました。聞いたままを書きます。なぜなら(1)昇降路に出っ張りがあると、ついつい工具置き場にしてしまうエレベーター係員がいるから。

(2)昇降路に出っ張りがあると、ついついそこに乗っかってかごをかわす場所になってしまう係員がいるから。(3)出っ張りの幅が大きいところではホームレスが住み着くことがあるから！だそうです。

昇降路の中は雨風をしのげるのでホームレスにはもってこいの場所でしょう。しかしメンテナンスをしようと戸を開けたとき、薄暗い中に人が寝そべっていたらぞっとしますね。出て行ってもらうのも骨が折れそうです。何よりもかごが動く場所に、エレベーター係員以外が居ること自体危険です。そんな理由から物理的に物が置けないよう、人が居られないようにするのがこの規則の目的だそうです。でもホームレスの人、どうやって昇降路内に入るのでしょうか？



(写真1) 昇降路の出っ張り Projection, Ledge

#### 1.2 「Section 2.2.4.2 ピットへのアクセス」

ピットの内側から乗り場の戸の錠を開ける手段を設けること。それは戸が閉まった状態でピットはしごから水平に1,000mm以内に位置すること。

つまり「インターロックからはしごまでの水平距離を1m以下にし、エレベーター係員がはしごにつかまったまま戸のインターロックを外して、ピットから出られるようにしなさい。」ということです。

両開きの戸で、はしごから遠い側のパネルにインターロックが付いていたら、はしごに乗ったままインターロックを外せないでしょう。その場合、乗り場の敷居につま先をかけて遠い位置にあるインターロック近くまで移動。不安定な状態で解錠するという、転落の可能性がある作業になります。エレベーター係員がそうしないよう、最大距離を規則で定めて、はしごとインターロックを同じ側に取りつけさせ安全を守っているのですね。

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

2. ピットにOOOが

あるアメリカ人との雑談のやりとりを紹介しましょう。私は彼に「ピットの水や、大量発生したゴキブリ駆除などに苦心してませんか?」と話しかけました。相手はカルフォルニア州サンディエゴを拠点にネバダ州、アリゾナ州などを担当するエレベーター検査官のリーダーでした。

それを聞いた彼は驚くかと思いきや笑いながら、「ゴキブリならいいよ。こっちはサソリがいるよ。」確かにゴキブリは刺しません。びっくりする私に彼はこう続けました。「サソリならまだマシ。ガラガラヘビが入り込めることがあるんだよ。」噛まれると細胞を破壊する猛毒を持ち、最悪の場合死ぬことさえある危険動物がピットにいるとは…。

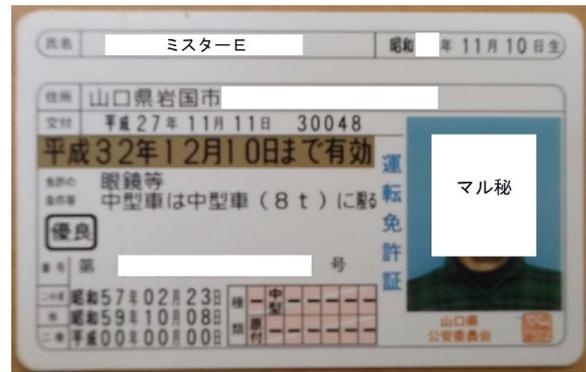
「どうやって気をつけてるんです?」「やつらはホントは臆病なんだ。人間の気配には先に気づいてる。だから、エレベーターに近づいたらドア越しに音を聞くんだ。居たら必ず警戒して尻尾を振る音が聞こえるから。そのチェックは絶対に忘れてはならないんだ。」

仰天する私にさらに彼が続けた言葉は「コヨーテが住み着いていたこともある。」でした。肉食獣で狼の親類。人が襲われなくなったことさえもある危険な動物です。彼の担当するエリアのエレベーターは主に砂漠地帯にあり、水やゴキブリなどは取るに足らないというエピソードでした。ある意味、命がけで仕事をしている事情を垣間見ました。

3. 私は誰?

ご紹介が遅れました。“ミスターE”と申しあげておきます。エレベーターに運命を感じた偶然とは(1)誕生日が11月10日(写真2)日本エレベーター協会さんが定めた「エレベーターの日」。(2)山口県岩国市出身。日本初のエレベーターの設計・設置にかかわった藤岡市助氏と同郷で実家も近く。(3)職場も訳あって11月10日をお祝いする。(4)流れでエレベーター担当に。エレベーターにかかわる意思なしで自然と仕事になった人は珍しいかも。(5)過去は鉄道マン。辞めてもまた2本の鉄のレール上を四角い箱を走らせる仕事をしている。

偶然だけとは思えません、もはや運命でしょう。おま



(写真2) 誕生日と出身

けに中学校時代の先生からは「エレベーターボーイ」と呼ばれていました。一度順位が上位になると、次の試験では急降下していたからです。

アメリカには公的にエレベーター検査官として認められるQEI(Qualified Elevator Inspector)という資格があります。アメリカ版「昇降機等検査員」資格といえるでしょう。NAESA (National Association of Elevator Safety Authorities: 全米エレベーター安全局協会) <https://www.naesai.org/> という組織が、資格試験と認証を行っています。

ある時私は、アメリカ人たちの前で「QEIを取りたい」と宣言をしました。すると何人かの資格取得者から「外国人には無理。」とハッキリ言われました。(差別ではありません、念のため。)  
「アメリカ人でさえ難解で、苦勞するんだよ。」これが私を発奮させてくれました。「それなら絶対うかって驚かせてみせよう！」

皆にこぞって無理といわれた難関資格にどんな作戦で挑んでいったのか、QEIの資格を取るとどんなことが起きるのか、新設のエレベーターで待ち受けるアメリカの検査!? アメリカで見つけたこんな機器、特色のあるエレベーター用語…などなど。肩肘張らない面白い話、ためになりそうな情報をこつこつ収集して提供していきたいと思います。

おかげさですが日米のエレベーター業界を独自につなぎ、お互いの発展に貢献できる「エレベーターアンバサダー」になりたい。そんな地位はありませんが、勝手に立候補したいと思います。これからお付き合いください。よろしくお祈りします!

【筆者の紹介】: 編集委員会

ミスターE氏は、永年「アメリカ規格」の昇降機の検査業務を中心に昇降機に携わってこられました。勿論、現在も現役のバリバリです。過日、当協会に「経験を生かした情報を提供したい」との申し入れがあり、寄稿していただくことになりました。山口県岩国市のご出身で、浅草凌雲閣の日本初となるエレベーターに携わった藤岡市助氏の生家から、清流

錦川を渡った対岸で生まれ育ったとのことです。

また、アメリカの公的なエレベーター検査官資格であるQEIにも挑戦されています。

年に一度アメリカに渡航されており、アメリカの昇降機業界の話題も提供いただけるものと思います。今後も寄稿していただく予定ですので、ご一読願います。